炭労の保安点検運動にこたえて

手記

三川指導部　弓掛　隆人

「危なかけん、注意せんな」「お互いに……」

三川鉱の坑底でのことだが、作業するときいつも皆が言う。

朝の、繰り込みのときの係員の口からも、「怪我せんごつ、御安全に」が日常の言葉。

だが私達は、今この言葉に余りにも馴れすぎていはしないだろうか。

炭労は、十二月一日より〝第九回保安点検月間運動〟の取り組みを指示しているが、会社側も〝年末年始保安強調月間〟を呼びかけ啓蒙を行っている。災害をなくすという意味では同じように聞こえるのであるが、炭労と会社の呼びかけの意味の根本的な相違を見、災害防止というものの本当の意味を職場の現実のなかから掘り起こし、真の災害予防に役立てたい。

災害ゼロをくり返すが……

会社は言う――「災害ゼロを目指そう」「死亡事故ゼロ達成を」と。

ところが一方生産の方を見ると五十四年上期出炭目標二百五十万トンだったのに対して、実績は減産二十三万七千百五十六トンだったというので、会社は「全国的に貯炭増」を宣伝しながら、さて現場では「赤字出炭をカバーするために、下期は、上期減産を補うのだ、というわけで、増産体制を実績で確立しつつある。自ら設定しておきながら、現場の現実は保安月間どころではない。

事実わが職場では、今月（十二月）初めより緊急作業が開始され

馴れ過ぎはないか？

生産増強の陰に必ず災害が

ている。六十五御関係の道中時間短縮のために、今後三百八十メートル坑道より三交替者を入坑させ一番方と二番方を二十分だけ早く繰り込み、減産分を取りもどそうというのである。

そのため、三百八十メートル坑道の輸送能力を、人・材料ともに増大させなければならず、それには車道を増設し、離合箇所（五カ所）を作って、待ち時間を短かくするなど、車道施設工事がいそがれ、当初の予定より一週間も工事期間をちぢめる緊急作業となったのである。

十二月二日、社内検査。同九日官庁検査。それに向けての、作業急ピッチ。応援者も加わり、入坑時も昇坑時も満員人車。てんやわんやである。たった一つの職場をだけでさえ、上期末の千九百五十二名から、退職その他で百十五名が減り、千八百三十七名。三池全山で見れば、四千六百六十三名から百八十名が減り、四千四百八十三名となる。そして、減少した人員は補充なし。つまり、減った作業人員で、増産計画の上に、上期の減産分まで取りもどそうと、会社はいうのである。

無謀な出炭増のかげでは、必ず保安が手抜きとなる。当然、災害が増えてくるであろう。

会社はいう――「保安については、お互いの注意と教育で負傷は減少します。また、保安につとめてもいます。そのためにも、出勤向上だ」と。

恐るべき坑底の職場の現実

私達の職場の現実はどうか。殆んどの仲間が、腰痛、神経痛、胃病で苦しんでいる。

欠勤が多くなる。すると、人事の欠勤取り扱いがきびしくなる。繰り込み場で、「この届出は人事からもどされた。受け付けられない」と係員。そして、「今度だけは……」、と言われると、無理をして出勤する者がいる。

これが恐ろしい。この無理が、現場作業中の負傷となるのだ。ところがそれを、「本人不注意」で片づけられ、私傷扱いでの病院行きとなる。数字に出されない怪我である。

十二月四日の午後一時三十分頃のこと、一番昇坑人車が出るのは午後二時八分。余り時間がないとき、砕石炭函が入った。車道の道床固めのために敷く砂利を卸すためであるが、この函は一般の炭車と違って横が上に開くようになっているため、楽で作業が早いが、然し、開けたフタをとめる金具がない。それで、一人がフタを手でもっていて、他の者がショベルでその下から砂利をかき出す。フタがばたんと倒れると、下で砂利をかき出している者の上にフタは落ちてくる。

このときは、「用心しろよ」と声をかけながら作業を始めたばかりのところで、不意にフタが落ちてきた。「あっ」といって飛びのいたので、さいわい怪我がなくてすんだが、考えれば馴れもあろうが、「危なかったなア」も怪我のうちとすべきだ。会社からいわれば、さしずめ「本人不注意」のよい見本といえよう。私達は考えねばならない。

炭労の指示にこたえるにも

炭労の保安点検月間運動でも取り上げている問題の一つに馴れをどうなくすか、があったが、このようなことを生み出す環境や原因の摘発、それは保安に対する重要な取り組みだと思う。

働く自分達自身として、本当に自分も仲間も共に災害にあわず、明るく、安心して働ける職場を作るための努力も大切で、それが今回の炭労の指示にこたえる意味でもあると思う。「保安と生産は車の両輪」といいながら、生産督励に血まなこの会社とわれわれ労働者とでは、口にする「保安」の同じ言葉も、意味はまったく違うということを銘記していきたい。

この日昇坑したら、三池労組の掲示板に、「北海道の清水沢鉱で災害、一名死亡」の壁ビラがはられていた。炭鉱で、災害のなくなる日がはたしてくるだろうか。

みんなが力を出し合おう

新聞〝はぐるま〟の歩みをふり返って

三川指導部　樺島　敬三

現在、各指導部にはかなりの職場新聞が発刊されております。私の職場でも、〝はぐるま〟という新聞が発刊されております。

〝はぐるま〟の発刊は、昭和四十二年にはじまりました。以来、百三十号を迎えました。その間何人もの編集員がかわりましたが、現在は二名の仲間が新聞作りに専念しています。

昔と比べて見ますと、内容も次第に充実した物となってきております。

新聞〝はぐるま〟が刻んできた足跡をたどって見ますと、そこには組合のいろんな闘いが連なっております。職場の全員が団結の力で成果を勝ち取った、昭和四十三年の有明機械移管反対闘争、四十四年の宮浦闘争、四十六年のZD導入反対アピール、そして各現場の保安改善・働きやすい職場づくりの呼びかけ等……。

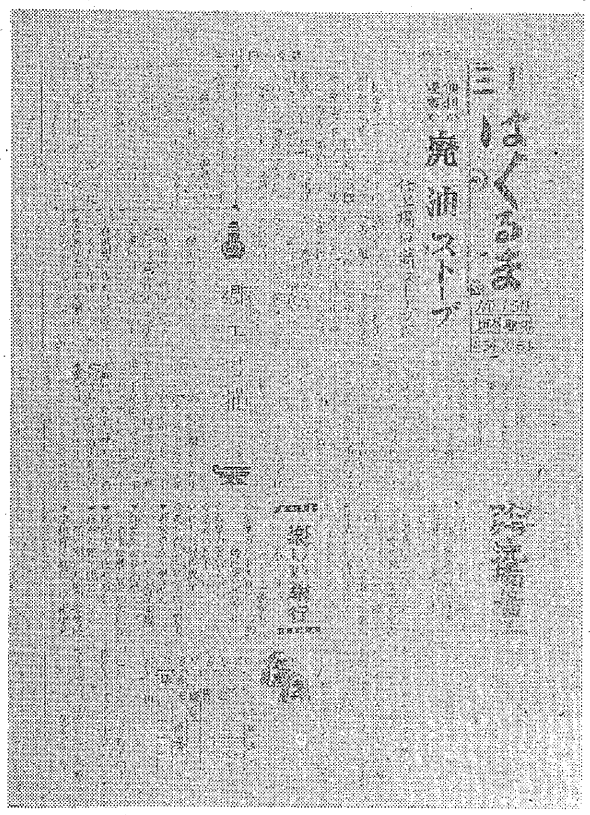
内容では、現在も続いている家庭欄、趣味欄、今は機関紙〝みいけ〟が続けている〝なかま〟欄は、こちらでは〝オーッ〟という欄があって、面影の紹介も、こちらは〝みいけ〟のような写真紹介ではなくて、似顔絵でした。昔から発行し続けられてきた新聞を一枚一枚読んでいくにつれ、「あ、こんなこともあったんだナ」「ほオ、こんなことも……」と、ひとしお懐かしく思い出されてきましたが、やっぱり昔も今も、新聞〝はぐるま〟が伝えてきた意味はただひとつ、労働者として、人間として生きるための闘いの一つだ、ということをしみじみ思います。

あるとき私は職制に、「ここに書いているのは（職場新聞〝はぐるま〟を手にしながら）、シラゴッじゃなかつか」、といわれたことがありますが、そのとき私は、「俺たちは真実を書いているのに、とやかくいわれるのはスジ違い」、とケンカ別れをしましたが、編集員をしているときは、こんなことはたびたびでした。私は今後も、職場の保安には十分に目を光らせ、悪い所があれば即刻みんなに知らせ、〝はぐるま〟を、職場全体の新聞として大いに活用していきたい、と思います。

また職場新聞は、家庭に持ち帰っても読まれるような、もっと親しみやすい新聞作りも大切だ、と思います。

×

筆者は、三川指導部十二分会（坑外）所属です。



新聞〝はぐるま〟の紙面。着実に歩み続けているのが、職場の者にはきっと頼もしいことだろう。

開催準備に着手

〝職場新聞活動者会議〟

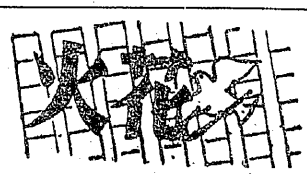
三池労組では、全職場に職場新聞を――をモットーに、常に職場新聞の発展に努力してきていますが、来年一月十九～二十日の二日間、平山温泉で〝職場新聞活動者会議〟を開催することにしました。

昭和四十二年から本格的に取り組めはじめた職場新聞活動の跡をふり返り、経験を出し合い、そしていよいよ組合運動のなかで重要性を増したこの活動を、さらに強化・発展させていくことを目指しているのです。

すでに準備にかかっていますが各職場分会でも、必ずもれなく一人は参加できる体制づくりを今から願っておきます。がんばりましょう。

学習を基本に

鳥取　二野宮智美



三池にまなぶ集会が終ったとたん急に寒くなりましたが、三池に行き、人間らしく生き、働きつづけるために闘うんだ、という労働者の生き方を考えさせられ、かえってきて、職場での闘い、そして学習を基本にやろう、と思っています。

今後とも、どうぞよろしくお願い致します。（以下省略）

×

二野宮さんのお住居は「鳥取県米子市灘町三丁目二十番地」。猿渡ハギエさんへのお便りです。ありがとうございました。

全国の皆さんありがとう！

過ぎてきた一年間、全国の働く仲間から、たくさんの激励の便りをいただきました。どんなにはげまされたか知れません。ほんとうにありがとうございました。

厳しい寒気前線が、北海道から南に向かってさがりながら、やがて日本列島全土をスッポリと包むことになるでしょう。そのなかで私たちはすぐそこに新しい年、新しい八〇年代の激動の期を迎えます。お互いに体をきたえ、しっかりと一つに団結し、前進しましょう。来年もよろしくお願いいたします。

――編集部